

野田北部幼稚園 2021 年度 公開保育 評価

(専門評価者)

公開保育実施日：令和 4 年 2 月 28 日 (月)

評価者：相馬 靖明先生 (和泉短期大学児童福祉学科・准教授)

【総合的な保育環境についての評価者のコメントと評価】

- ・オープンエンドな素材で遊ぶことで創造性が育まれる
 - ※オープンエンド：途中で変更や修正が可能であること、数量などに制限を設けないこと
 - ex：雪だるまをつくるために白い紙を、自分たちではさみで四角く切った。それを黒い紙にはって並べていた。
いつの間にかロボット作りに変わっていた
(1つの素材から別に発展するアイデアが自発的に生まれてくる、図形の感覚も養われる)
- ・意欲が持続するための環境をつくる
 - ex：魚釣りで楽しく遊んでいたら、翌日も釣ざおを目につくところに置いておく
- ・活動意欲を持続させるためには、その活動において「自分で手を加えた」という体験があることも大切
- ・活動が数日にわたって継続するためには、自分が手を加えたものを上手に保管することが大切 (飾り棚やコンテナボックス等を活用)
- ・活動が継続すると、新たな「①モノ②ヒト③情報」が補給されないとマンネリ化でつまらなくなるので終息する。
終息したほうがいい場合もあるが、継続させていく環境も意識することが大切
- ・次週に向けた振り返りを実施するときには
 - ①継続していく環境は何か
 - ②不要な環境は何か
 - ③追加する環境は何か を意識することが重要である。
- ・子ども自身がその場をつくらうとすることも増えてくる
 - ①自分で新しいものを持ち込んでくる
 - ②友達を呼び込む
 - ③必要なものを求める
 - ④空間を俯瞰してみたり、並べてみたりすることで新たな発展をすることもある
- ・新たな環境、情報を保育者は意識的に入れていく
- ・裸足保育もいいけれど、小学生に向けて運動靴に慣らす上で、5歳後半になってからは上履きで過ごすことは大切

【園庭を以前と比較して】

- ・5年前とは景色が全く変わっていた。(植栽や遊具、総合的な豊かな園庭環境に変化している)
- ・子どもたち自身で“道具”を使って遊びを発展させている。(環境への自発的な関り方の変化)
- ・まわりの音を聞きながら、「どっちに遊びに行こうか」判断しているシーンがあった。子どもたちが自分で考えて遊んでいるコトが分かった

野田北部幼稚園 2021 年度 園としての自己評価

野田北部幼稚園 Style Book 2 野田北部幼稚園スピリット

(4) 教育目標

「生活を自分でつくり
明日を創れる子を育てる」

①めざす子ども像

生活を自分でつくり、明日を創れる子

- 1) 健康：健康で意欲あふれる子ども
- 2) 生活：遊びと仕事のどちらも好きな、自分で生活をつくれる子
- 3) 自然：自然や文化にたくさんふれて、知的好奇心や探求心をもつ子ども
- 4) 表現：発見や感動を自由に表現しつつ、想像力や創造力がゆたかな子ども
- 5) 人間関係：友だちやおとなと交わる体験をとおして、
ともに生きる喜びを実感できる子ども

②実現したい園生活像

- 1) 子どもたちが時間・空間の主人公になれる、生き生きとした健康的な園生活
- 2) からだ・手・ことばの全てを使って、人間的な感性や知性の土壌を耕す園生活
- 3) 園外も生活圏にした、ゆたかな自然や本物の文化と交わる、
広く奥行きのある園生活
- 4) おとなたちから寄り添われ、子ども自らも人やものに寄り添う体験
ができる園生活
- 5) 子どもたちが今日を喜び、明日を楽しみに待つ園生活

7

時代の変化と相まって、不確実性の高い社会においてより強く求められる資質の変化を実感し、あらためて様々な研究結果などをもとに、子どもたちにとっての「遊び」の重要性を認識し、具体的な保育の見直しを数年来、取り組んでいる。（質の高い幼児教育が、将来的に、効果的な教育投資だという認識も広まってきている）

当園の課題として、【大人視点での活動に追われ、子ども達が主体的に活動できる（自らの意志で選択できる）遊びの時間を十分には確保してこれなかった】という点について、「何を改善していけば良いのか？」「活動のどの部分を削減することができるのか？」、少しずつ検討と改善を行ってきた。（すべて無駄ではないが、優先順位の中で取捨選択が必要である。）

長年おこなってきた一斉活動には一斉活動としての利点もあった。例えば、保育者が保育を主導していくということで、「今日はこれを完成させる」というような、その日の到達課題と活動の見通しが明確にあるという安心感のようなものがあった。

一方で、保育者が設定した活動に対して「うまく出来る子」「うまく出来ない子」というように、保育者基準で

子どもたちを相対評価してしまう保育者の意識を変えていくことも課題のひとつであった。

「遊びの重要性を再認識し、子ども主体の保育に変えていく」ということは、保育内容（カリキュラム）だけでなく、今まで当たり前と思いきんできた「保育者自身の意識」もアップデートしていかないとけないという難しさがある。

養成校の段階や今まで実施してきた保育の方法に対して、「このままで本当に良いのか？」と日々の保育で保育者自身が試行錯誤し、以前の保育観とこれから目指すべきとしている保育観（人間像）の中で葛藤しているような部分もある。

葛藤の中でも、できることから少しずつ変えていくプロセスの中で、「子ども達の姿の変化」が見てとれ、手ごたえが感じられる部分も見られるようになっている。

まだまだ課題はあるものの、時代に即したかたちで、子どもたちにとっての最善の教育環境の実現のために、保育者、そして保護者の皆様のご理解をいただけるような情報発信（保育の可視化）も大事にしながら、「こどもを中心としたよりよき社会の実現」に取り組んでいきたい。

【園の環境で改善できた点】

●室内と戸外との間に中間エリアが設けられると、そこが新たな遊びのスペースにもなっていく（参考：仙田満「こどもを育む環境、蝕む環境」）という視点で、新園舎の1階のテラス部分にウッドデッキを設置し、テラスに設置されていた柵も撤去した。（2021年施工 工事費200万）

園庭から死角になっていた柵がなくなったことで、子どもたちの様子が遠くからでも見やすくなったり、子ども達が室内外のどちらにも意識を巡らせながら、そこでゆったりとした時間を過ごすような姿が見られるようになった。活動に追われ、常に緊張感漂う雰囲気から、ゆとりある環境を創造できたことで、子ども達の自発的な遊びを誘発する土壌ができた。

●絵本コーナーの設置、絵本が増冊（2年で300冊程度）されたことによって、子どもたちがさまざまな物語に触れる機会が増え、子どもたち自身が読みたい絵本を選び、「今日はこれを読んで。」と、自ら保育者にリクエストする姿が増えた。また絵本コーナーのあなぐら的な空間を気にいって過ごす姿や、保育者を真似ながら友だちに読み聞かせをしているような姿も見られ、自然と「文字と親しむ」機会も増えている。

●人的環境の面では、パパーズやママーズ、花いつ等、保護者の方々の力を借りておこなう活動が、子どもたちの見えるところでおこなわれる機会が増えたり、地元の農家である山田さんや瀬能さん、動物園の飼育員さんや生き物博士等…多様な大人と関われる機会が持てるようになったりしたことは、子どもたちにとって、とても貴重な体験になっている。

【保育者と子ども】だけの関わりにとどまらず、自分たちの身の回りには多様な大人が沢山いるということを知りきっかけになっており、人を通して社会を知り、興味関心の世界が広がっていく様子が感じられた。

例えば、お米を作っている瀬能さんの働く姿を見たり、話を聞くことで「これ瀬能さんが作ったお米かな？瀬能さんがお米も野菜もいっぱい食べてって言ってたよね。だから給食のご飯全部食べたよ。瀬能さん喜んでくれるかな？」と、瀬能さんの思いと給食を結び付けていくような姿が見られるようになったことは大きな変化だった。

● 戸外にバーゴラ設置したことで、色水遊びや製作遊びの拠点ができ、やりたい子がその場所に集まってくるようになった。日陰もできてよかったと思う。（遊びを誘発する拠点づくり）

● 園庭の築山の大きさを大きくし、土留めを設置したことで、斜面での遊び（水流し）、穴掘り、泥だんご作りが盛り上がるようになり、土や水、ドロドロの感触を楽しめるようになった。

【遊ぶ時間を確保して改善でき点】

● 遊びの時間を確保していくことで、幼稚園を楽しみに登園する子が増えたと保育者が感じている。（自分で好きな遊びを見つけて遊べること。）（十分に遊び込める時間と空間があること。）は気持ちの安定に繋がったり、「やりたい！」という意欲が膨らんだり、十分に遊び込めることで活動時の集中具合も良くなったように感じる。

また、「●●したい。」等、自分の思いを主張出来る子も多くなっていると感じる。意見の相違や喧嘩も多くなるが、その分友だちとの関わりも密になっていく様子が感じられる。

● 異年齢のこどもたちの姿が自然と視界に入ってくるようになり、様子を見たり遊びを真似したりと刺激を受けることが多くなった。

● 活動に追われて毎日が終わっていくのではなく、生活にゆとりが生まれ、保育者自身が、遊ぶ子どもたちの姿を読み取ろうとする姿が見られるようになった。（出来る。）（出来ない。）の単一の評価基準から、子どものありのままの姿を受けとめ、その姿を楽しもうとするような見方が出来るようになってきている。

● 遊びの姿を共有しあうことで、その時期における年齢に応じた育ちを再発見したり、年齢によつての遊び方の違いや特徴を再認識するようになった。

● 特に年長児の姿であるが、友だちと一緒に考えながら長期にわたって1つの遊びを作り上げようとする姿が見られるようになった。

【これからの課題】

・静的な遊びに集中しきれなかったり、作ったもの、続きをやりようと思っていたものが同じ空間の子ども達に壊されてしまうことも多い。仕切り（パーティション）を使って、しっとりとした空間を確保したり、壊されないで保管できる方法を考える必要がある。

・「子どもたちが自由に製作が出来る環境を設置したい」と考え、園全体の共有コーナーとして製作コーナーを設置してみたものの、うまく定着せずに消滅していくこともあった。長続きしない環境の問題点とは何かを引き続き研究していく。

・子どもたちの様子を記録して保育者が考察していくこと。子どもたちの姿から次の働きかけを考えたり、環境に

変化を加えていくことができるようになると一層遊びに変化が見られるようになっていくと考えている。また、様々な素材に触れさせてあげたいと思うが、無駄に使ってゴミを増やしてしまうような現実もある。限りある資源でもあり、大切に使う意識を持ってもらうための働きかけができないか？と検討している。

・「この時期の子どもたちに、こんな経験をさせてあげたい（保育者の願い）」をどう実現していったらいいのか？そのタイミングと方法を考える必要がある。興味を持たないことに対してはやらない子どもも当然いる中で、どうしたら1つの共同体験を味わえるか。苦手意識があるものに対して、「やってみよう！」と思えるきっかけをどうサポートしてあげられるのか。経験のばらつきを、保育計画に反映させていくか。一方で、子どもの権利（やらない権利・意志）をどう保証するかもあわせて検討していく必要がある。

・特に低年齢（2歳児、3歳児）に関しては、クラス全体の「まとまり」を重視するのではなく、より個に重点を置いて、ゆったりとした関わりの中で「個の育ち」に時間をかけていくようバランスを検討する必要がある。クラスをまとめることに対して、保育者が急ぎすぎることの弊害も理解しないといけない。

・「記録→振り返り→試し→改善」を繰り返す意識。クラスドキュメンテーションと個人ドキュメンテーションの活用を、保育者の省察に活用する必要がある。

・何事も子ども達にとって、「楽しい」（心が動く）と思えるところからの導入を考えていくこと。「させるべき」の意識では、個々の意欲などの面で深い学びにならないと理解する。

・まだまだ課題はあるが、子どもたちを主と捉え、可能な箇所をから一つ一つ工夫を加えていく。そのためには学年を越えて保育者同士が話し合える機会を定期的に設け、新たな視点を得ることが重要と考えている。短期的なカリキュラム的な視点から、より子どもたちの深い学びの視点（非認知能力や自己効力感）を園生活に改善を加えていく。

以上